

# 大阪を生きる 12人の物語 第1回

HOST 高島幸次

ゲスト 朝井まかて



HOSTである歴史学者・高島幸次さんとゲストとの対談を通し、大阪の文化的魅力を掘り下げる『大阪を生きる12人の物語』。記念すべき第一回は、作家の朝井まかてさんをお迎えしました。「大阪×小説」がテーマの楽しい掛け合いを、ぜひお楽しみください！

## 大阪文学学校が人生を変えた？

高島 こうしてまかてさんと直接お会いするのは二〇二一年一月二十五日以来ですから、ほぼ一年ぶりですね（収録は同年十二月十二日）。今回の対談場所である大阪天満宮の北隣に、天満天神繁昌亭という落語の定席があります。その毎月二十五日の夜席は、僕が企画をお手伝いして天神寄席というのをやってるんですが、そのゲストにお越しいただいて以来です。本当やったから、その後もいろいろお会いする予定があったんですけど、みんな流れてしまっただけです。その間、どうでした？ サラリーマンなどと違って作家さんはずっと家に閉じこもって原稿を書いてはるから、コロナの影響が少な

いような気がするんですけど。

朝井 もともと書齋に引きこもってますからね。ただ、取材がしにくくなりました。あと、こっちは国会図書館（東京・千代田区）が遠いから、いつも編集者さんが代わりに走ってくれはるんですけど、予約制で人数制限もあったから、資料が届くのにずいぶん日数がかかったり。東京での文学賞のパーティーはあんまり行くほうではないんですけど、自分が選考にかかわった新人賞の授賞式も開催自粛が続きましたので、それは待ち遠しいです。やはり、顔を見ておめでとうと言いたいので。

高島 最近の賞の審査は、オンラインですか？

朝井 ええ、今年のリモートでしたね。

高島 仕事のメインである執筆については、コロナのおかげではかどった？

朝井 いや、センセ、はかどりはしません（笑）。

高島 まかてさんが書くようなエンターテインメント的な小説は、在宅の人が増えたことで売れ行きは上がったんじゃないですか？

朝井 え、そうなの？ 知らなかった……（苦笑）。

高島 そろそろ本題に。今回対談するにあたって、一

応ウイキペディアで調べてきたんですけど、小説を書き始めるのがすごく遅いですよね。甲南女子大学の文学部に入ったときには、作家になろうって意識はなかったんですか？

朝井 子どものときから読むのも書くのも好きで、何か書きたい気持ちはずっとあったんです。作文書いたらよくほめてもらってたし、高校生くらいになると勉強しなくても点数取れたのが日本史と古文で、大学では文学部国文学科に入るのが自然な流れだったんですね。当時からちょこちょこ、しょうもない詩とかは書いてたんですけど、小説は書きたいと思ってどう書いたらいいかわからないまま、偶然コピーライターの道に入っちゃった。

高島 えっ、小説家になるために計算ずくで言葉の仕事を選びはったんとちゃうんですか？

朝井 私、計算や計画ということがでけへんのです。あとで振り返ってみたら遠回りの道草だらけの生き方なんですけど、その時はわかりませんもの。コピーライターになったのも、幼稚園のときからの親友がたまにたまスタイリストになって、彼女が出入りしている制作会社でコピーライターを探してたんです。それで、